



今年は戌年

今年こそは良い年であって欲しいとの願いを誰もが持っている。というのも昨年末の世相を表わす1語に「北」が選ばれ、これは北朝鮮による不法なミサイル発射実験の強行が世界に及ぼす国際的難問題であることを示しているからだと思われる。今年の干支は戌年で犬や狗とも書かれ、中国では狗年と表わす。犬は古代の壺や彫刻にも描かれ昔から人間と一緒に暮らしている関係の深い動物である。犬は人間に忠実で人間から見てこれほど親しみを感じる家畜はなく、昔から犬は“3日飼えば三年恩を忘れない”と云われている。江戸時代には生類憐みの令を制定し、特に犬を保護して“犬公方”と言ったことは歴史上有名である。そこで犬に関する事柄について考察してみたい。

犬は一般には屋外で飼育され、犬小屋や鎖に繋がれているものである。そのため毎日のように犬の散歩を習慣にしている人は多く、これは飼い主にとって厄介な仕事であるが、このことは人間にとって健康維持にはとても有効なことと思われる。また犬は古代から人間との友好関係にあり、人間社会に様々な分野で活躍している数少ない動物の一つである。即ち犬には人間の遥かに及ばない特異な先天的な能力や特技をもっていて色々な分野で有用しされてきた。

1) その一つは犬が匂いを嗅ぎ分ける高い臭覚能力を持ち生物に含まれる有機物についてみると人間の一億倍ともいわれる能力を持ち、その訓練によって麻薬探知犬として犯人の足跡や犯罪現場の遺留品の捜索に当たる。また警察犬としての歴史は19世紀末にドイツにおいて使用されたのが始まりで、日本では1912年に警視庁がコリー犬を採用したのが最初という。また最近では災害救助犬としても訓練されている。

2) また犬の頭脳を生かした仕事としては目の不自由な方々の安全誘導を果たすことのできる盲導犬として、道路の端を歩く、段差で止まる、障害物を回避する、などの大切な訓練を仕込まれていて、個体によっては人間の3歳児以上の能力をもつものもいて、その犬には白か黄色のハーネス胴輪を着けている。

3) 犬の先祖はオオカミであるが犬という別名になっても、なおその時代の癖を沢山もっていて、この習性に関わる仕事がある。牧畜犬とは牧場で家畜が散らばらないように監視し、外敵から守る仕事であり、牧畜としては羊、牛、山羊などが対象となる。

次に古くから世界的に語り継がれている有名犬について述べてみたい。

1) バルトは1924年アラスカ北部の都市ノームでジフテリアの大流行があり大量の血清を運ぶ必要があったが、空輸できなかつたため、100頭以上の犬ぞりで全長1085キロメートルのリレー輸送を行い、多くの人を助けた偉業として大々的に報

道され、犬ぞりのリーダー（バルト）の銅像がニューヨークに建立された。

2) ハチ公の話は有名で改めて述べるまでもないが、渋谷駅前で主人の帰りを7年間待ち続けた日本の忠犬である。主人の死後2年間は買主が目まぐるしく変わったが、最後に元の飼い主の出入り職人に飼われ、其のころからハチが駅に現れるようになり、それから7年後に「忠犬ハチ公」を題材とした記事が朝日新聞に掲載されてから一躍有名になり、教科書にも採用され、その後忠犬ハチ公の銅像が設置された。

3) 名犬ラッシーは1940年頃の短編映画「名犬ラッシー家路」で有名になり、ラッシーを演じたのはコリー犬（パルという名）で人気は凄まじかったという。

4) 1884年にイギリスの画家のもとで飼われていたニッパーという名前の犬は、日本ビクターの企業マークとして使用されていて通称“ビクター犬”と呼ばれていた。私が子供の頃家にあつた蓄音機にそのマークがあり、それは今もわが家の片隅にある。

次に人間の学術的な行動計画によって、不幸にも有名になった犬がいる。それは

1) 地球を周回した犬ライカ（クドリャフカ）は1957年に旧ソ連の人工衛星スプートニク2号に1頭だけで乗せられて地球軌道を周回した初の宇宙犬である。しかし人工衛星には帰還のための装備はされてなくライカが再び地球に帰って来ることはなかった。この件は世界中から非難を浴びることになったが、宇宙へ地球の生命体が飛ぶ道筋をつけてくれたのは確かで、その4年後にガガーリンが人類初めて宇宙へ飛び立ち無事に帰還している。

2) 日本のタロとジロは南極における過酷な環境の中で1年間生きのびた犬として知られている。当時北海道に生息していた約1000頭の樺太犬の中から23頭が選抜され、昭和32年宗谷が南極に着き第1次越冬隊員と共に犬22頭が残った。1年後の昭和33年には宗谷は悪天候で基地に入れず、鎖に繋いで犬を残したまま帰り国民の激しい非難を招いたが仕方のないことであつた。その1年後の昭和34年に隊員が行ってみるとタロとジロの2頭だけが奇跡的にも飢えを忍び、過酷な南極の地で生存していた。この奇跡は当時の日本に大きな感動をもたらしたが、映画南極物語として今日に至るまで語り継がれている。

今一番注目されているのは柴犬マルで、恐らく日本で一番のアイドル犬だと言われ、東日本大震災後の暗い世相をマルの穏やかな笑顔が被災者の心を明るく温かくしたとして大人気になっているという。

当院では院長が柴犬（虎太郎）2歳数か月を飼育し、毎朝のように別棟の我が家を訪問し少しの餌を食べて帰るが、これは私たち老夫婦の見回りも兼ねていると思われ有難いと感謝している。

